

南山法学 38 巻 1 号 (2014 年)

論 説

アリストテレスの 取財術について (1)

高 橋 広 次

はじめに

第 1 章 家と国における財の意義

第 1 節 構成部分と必要条件

第 2 節 家政術と取財術

第 2 章 アリストテレスの交換的取財術

第 1 節 交換的取財術の諸形態 (以上, 本号)

第 2 節 交換諸形態の変化の意義

第 3 節 貨幣のスコラ学的意味づけ

第 3 章 中世に継受されたアリストテレス的経済観

—— トマスの商業観

第 1 節 公正価格論

第 2 節 利子論

第 4 章 財の使用

おわりに 自給自足と貨幣経済

はじめに

財は人間の生活に欠くことのできない善であるが、古代人の倫理観として目を惹くのは、概して、財を軽視する姿勢が高く評価されていたということである。断定は差し控えるが、たとえば中国の儒教やヨーロッパのストア派などの倫理的な教説では、富貴は「浮雲の如き」ものであって、人間的生の追求すべき最高目的ではないとされていた。その理由は、哲学的な内省に基

づく人間的生の段階区分による。それによれば、人間の生の最高層は心的魂であり、その中でも最奥部に位置するのが精神であるとされるが、この部分は神の働きにも似ているものだからである。これに比べれば、身体層は動物とも感覚を共有するもので、尊厳性は低いとみなされた。動物は生命の単なる充足、すなわち地面の餌にしか関心がなく、生命を超える価値、すなわち天界の理についての感覚を欠く存在である。この人間存在の段階区別が同時に倫理的評価の根拠を与える。したがって、倫理的評価の高低をつけるに当たって、この順序を転倒させることは間違いであることになる。身体的諸関心、とりわけ食糧確保などに心を煩わされる事態は、精神を高く保持するための妨げ以外の何ものでもない。ここから外的善に対する「平静」とか「無関心」を涵養することが、賢者の、あるいは君子の修養の眼目となった。またプラトンの理想国では、統治者は、その知的な職に専念するために、肉体を労する作業や利得を追求する商業を営んではならない。

ところが、これを知識社会学的な観点から評すれば、生産力の低い古代にあって、財は希少資源であり、したがって貴重であったことを顧みることが求められる。この時代、希少な財は、それだけに生存を全うするために財を奪おうとする闘争心や、奪われまいとする防衛心が強かったことが予想される。こうした地上の争いを醜いとして逃避する姿勢が、かの古代人の到達した高邁な倫理の強調を生み出したと見ることもできる。イソップの寓話に知られるように、「あのブドウは酸っぱい」というやせ我慢が、倫理の背面を支えていたとも勘ぐられよう。現に、生産力が飛躍的に高まり商品が過剰となった現代の一部の先進国では、もはや倫理的修養の前提とされた禁欲は不要のものとなり、効率化による負担の軽減や快楽の充足である消費活動が生最高の目的となった観を呈しているようにも思われる。このとき併行して、かの精神と身体が存在論的な区別はうすらいでゆき、往時の倫理的実践に伴う緊張感、さらには悲壯感などさほど感じられなくなった。身体の解放は倫理学に代わり経済学を発展を加速させたと言えよう。もつとも、こうした加速化が現代において社会的絆の道徳的弛緩から衰弱の趨勢を示すに及び、さ

まざまな社会問題を生み出して、政治から教育に至るまで激しい議論のさなかに置かれていることは周知のとおりである。

しかし、およそひとは、この世に生を受けたからには、それに必要な物的手段を所有し、他人からの役務を求めざるをえない。个体維持、家族の維持、理性的存在にふさわしい生活のために必要な財貨と役務が用意されていなければならない。身体や感覚的なものの生における重要さの意義は、無論すでに古代にも自覚されていた。中国の有名な『管子』の「倉廩実つれば即ち礼節を知り、衣食足れば即ち榮辱を知る」¹⁾、あるいは、『孟子』の「恒産無き者は恒心無し」²⁾は、一定の財産を持たない者は正しい心が持てないということを教えており、一般にも「富貴にして善を為し易く、貧賤にして功を為し難し」とも言われる。富は忌避すべきものではなく、ある程度の財産所有はむしろ道徳的行為が可能となる前提をなすものである。なぜなら、無一物の者は生活の安定を失い、持てる他人や集団の意志に依存せざるをえなくなることに鑑みれば、財産こそ個々人の人格的自由と独立を保障する基盤であると考えられるからである。この指摘は家や国にとっても同様に当て嵌まる。

それではアリストテレスは、以上のようなさまざまな財産観にあって、財に対してどのような独自の観念を抱いていたのであろうか。財の取得と使用に関するテーマは、とりわけ彼の『政治学』第1巻で集中的に議論されている。そこで名づけられた術は「家政術」、*οἰκονομική* と呼ばれているが、この名称は今日に言う経済論に通じる。ただし古代社会における経済論は今日の経済学と異なるだけに、現代的先入見を排して理解することが肝要である。古代の経済活動は、現代の高度な経済活動の素朴な原初的形態でしかないとは必ずしも言い切れないからである。それは倫理的価値と不可分の関係で捉えられる独自性にある。現代の学問方法論は、それぞれの社会現象を倫理から切り離して断片化したうえで、その固有法則性を明らかに指摘することに特徴を持つ。しかし、彼の「経済現象」に関する考察は、その他のたとえば「法現象」の分析でも同様のことが言えるが、人間現象にしみわたる倫

理的浸透の総合的な考察を基礎に置きながら、個別現象の分析として、今日にいう科学的方法を思わせる先駆的な業績を残しているとも思われるのである³⁾。

そのことはとりわけ、財の使用価値と交換価値の区別から展開された彼の貨幣論にある。最初は交換における必要から発生しながら、いったん成立するや個々人の主観的思惑から独立の存在を獲得し、逆に個々人の意識を限定し方向づける力を帯びるに至る貨幣制度の特徴が指摘される。わが国の哲学者西田幾多郎の言葉を用いるなら、「作られたものが作るものを作る」⁴⁾社会制度の魔力とでも言えようか。人間の手によって作られながら人間のコントロールから離れて、反対に人間を頤使用する。制度のこのような客観的独立性の確立の過程は、一般に社会制度の歴史的変遷を描くに当たって一つのパラダイグマとなった。この意味でアリストテレスの指摘は制度存在論の礎を築いたものであると評しうる。この分野においても彼は、古代の数少ない経済的文献の中で、後世にまで論議される経済的原則を発掘し、いわゆる資本主義社会における「経済法則」の発見に専念した古典派経済学やマルクスを経て現代にまで少なからぬ影響を与えている。

しかしながら、アリストテレスはいったん経済現象、とりわけ貨幣と商品経済の固有法則性を明らかにしながら、再びそれについての倫理的な正・不正の評価にコミットしている。彼は『政治学』において、「国制」*πολιτεία*につき、正しい国制と逸脱した国制との明別を試みたように、「家政術」においても、それに従属する「取財術」*χρηματιστική*について綿密な吟味を凝らし、正しい取財術と逸脱した取財術を区別する。本稿は、この取財術の中でも特に中心をなす「交換」による取財方法の問題点をめぐる彼の考察を取り上げる。彼の倫理的基準の設定は、事物の存在や人間の行為や制度が目指すそれぞれの「目的」*τέλος*によって行われる。秩序づけるものが目的を与えるのであり、秩序づけられるものはこの目的に適合するときに、それは善いと判断される。国政も家政も、この目的に方向づけられねばならない。

それでは、国際的な分業体制を前提として活発な貿易を求める現代のグ

ローバルな経済現象、物作りを中心とする実体経済から金融商品の先物取引にまで展開した貨幣経済等の理解と評価に関して、アリストテレスの経済観は完全に時代遅れのものとなったのであろうか。彼の経済の主体は、国境を超える個人ではなく、自給自足を原則とする「家」であり「国」である。この点につき、われわれは世界の食糧・エネルギー資源の無限性は未来もなお信頼できるかどうかを念頭に置く必要がある。「無限」とは、「限界」*πέρας*を置く「目的」が欠落した状態であり、無目的を意味する。これはアリストテレスのみならず古代ギリシア人が忌避した概念である。なぜなら「無限」は同時に、倫理的なアノミー状態を個人に、そして社会に引き起こすからである。交換経済は制度的に不可避である。さりながら交換経済は逸脱の危険性を秘めている。交換経済におけるこの苛むような問題の所在を既にアリストテレスは勘づいていたのではなかろうか。前号で、われわれは『ニコマコス倫理学』を中心に、財の「交換」について正義の観点のもとにこれを捉えて、「交換的正義」の特徴を明らかにすることに努めた。本稿では、この同じ「交換」を経済現象の中で捉え、『政治学』によりつつ、究極目的である有徳な「善き生」との関わりで論じることにする。

第1章 家と国における財の意義

第1節 構成部分と必要条件

1. 有徳な生活の内と外

アリストテレスは『政治学』第7巻第1章で、最善の生活に関する善きものを三つに分け、肉体の外にある善きもの、肉体の内にある善きもの、魂の内にある善きものとして、それらすべてが幸福な者には備わっていなければならないとすることに反対する者は誰もいないだろうと言う⁵⁾。ところが、その量と優劣の点では意見を異にする。徳はある程度か持っていれば足りる

と信じ、富や金銭を限り無く追求してやまない者もいる。これに対し、彼は、徳を外的な善きもののためにではなく、後者を前者のために獲得することが肝要であると力説する。幸福は、徳の追求には過度であっても、外的善の獲得に関しては適度を得ている者には多くあり、外的善を自分の使用しうる以上に持っているが、徳に欠ける者には少なくしか存しない。この議論を踏まえて、財に関する彼の基本的な見解が次のように要約される。「外的な善きものは何らかの道具と同様に限界を持っている。そして凡て有用なものは、もしそれが限界を越えて過度になれば、必然にそれを所有している者に害を与えるか或は何の益をももたらさないものに属しているのである。しかし魂に関する善きものは何れもそれが過度になればなるだけ、一そう有用なのである」⁶⁾。

徳の追求は「過度」であっても差し支えないというのは、『倫理学』に言う「中庸は徳の至れり」という原理を踏まえているのであろう。最高の徳である中庸(メソテース)は、水平面に位置する悪徳の両極端ではなく、垂直面の「頂極」(アクロテース)に位置するからである⁷⁾。これに対して、外的財は、優越する価値を持つ魂のために選択されるべきで、その逆であってはならない。外的財は人間的生にとって「有用」な *χρήσιμον* 価値ではあるが、「立派な」*καλόν* 価値ではないという優劣の区別があるからである⁸⁾。『政治学』第7巻第14章で、全体としての生活を二つの部分、すなわち生活に必要で有用な事業 *ἀσχολία* と立派な閑暇 *σχολή* とに分け、「事業は閑暇のために、必要で有用なものは立派なもののためにあらなければならない」⁹⁾とも述べている。「事業」は *business* と表現されることに、「多忙」つまり「閑暇なし」と見られることにも、彼の(あるいは当時のギリシア知識人の)実業観が窺われるが、第1章で問われた「最善の生活」の定義とは、結局、「それぞれ個人にとっても、一般に国にとっても、徳に即した行為に与かり得るだけの外的善を備えた徳と結びついた生活である」¹⁰⁾と規定される。この規定の内に、アリストテレスの基本的な財産観が言い表されている。それは財産所有の正当化根拠であるとともに、限界根拠をも指し示して

いると言える。

以上示したアリストテレスの「最善の生活」とは、個人や国のみならず家にとっても同様に目指される目的である。いずれにおいても、財産は、これらの生活の「外的」条件であって、その「内的」構成要素ではない。財産は、善き生にとって**必要**かつ有用な条件であるのに対し、有徳な実践的生、さらに閑暇における観想的生は、人間**全体**の本質的生を内部より構成する**部分**である。こうした生活は、個々人を包括する共同体（コイノニア）である家において、さらに諸々の家を包括する最大の国においても同様に求められる。ところで、今述べた「必要」ἀναγκαῖον、「部分」μέρος、「全体」ὅλονという言葉は、『形而上学』第5巻の「哲学用語辞典」を踏まえていることに注意する必要がある。実はこれらの言葉に、アリストテレスは厳密な意味を与えて用いている。家や国に関してこれらの言葉を駆使する『政治学』に立ち入る前に、これらの言葉の持つ形而上学的意味を垣間見ておこう。

2. 事物の必要・部分・全体

(1) 「必要」ἀναγκαῖον

アリストテレスは『形而上学』第5巻第5章で、「必要性」（あるいは必然性）について三つの意義を分ける。① それがなくしては善さがありえないもの、② 衝動や意志に逆らってこれを阻止したり妨害したりする強制、③ それ以外の仕方ではありえないでただ端的にそうあるもの、である。②は彼がよく用いる例として挙げる、暴風によって目的地から離れた場所へ押し流された船乗りが該当しよう。③は『倫理学』で多用される言葉、自然法則や数理・論理学の原理が当て嵌まる。われわれがここで関心を持つのは①の意味である。それは「生存するためやよくあるために不可欠な協働原因 σύνναιτιον の場合」の必要性（必然性）である。「たとえば呼吸作用や栄養物などが動物に**必要である**（アナンカイオン）と言われるが、それは、これらがなくては動物が生存しえないからである。なおまた、**それがなくしては善いことが存しえず生じえずあるいは悪いことから脱することや免れることができないところ**

のそれも、そう言われる。たとえば病気から脱するためには薬を飲むことが必要であるとか、金を儲けるためにアイギナに航海せねばならないとかいう場合である」¹¹⁾。善くあることそのものの本質をなすのではないが、善くあるためには他の何かがなくてはありえないその「他のもの」が、必要不可欠な協働原因と呼ばれる。

質料要素は国の命運を形作るうえで重要な役割を果たす。国もその発生の順から見れば質料から始まり、やがて固有の善を得るためには好都合な道具 *ὄργανον* を必要とする。この協働する道具が十分に調達され活用されるなら、国の目的に積極的な好結果をもたらすであろう。国の領土は、人口や地形や資源の面で有利不利の場合がある。たとえば、資源において不利であるなら、アイギナへの海外貿易は、政治にあずかるものにとって必要な手段であると言いうる。実際、アリストテレスは、『政治学』第7巻第6章で、「生活に必要なものを供給するためにも、国都や国土が海に通じている方が優っている」と述べ、また「自分のもとに何か無いものがあれば、それを輸入し、産物に過剰なものがあれば、それを輸出することは必要なことに属している」とも述べているのである¹²⁾。この論述から考えれば、アリストテレスを単純に商業蔑視論者と論評し去るのは適切でないように思われる。ただし、商取引には反面、国民の道徳的風儀の面での問題を持ちこむ危険性に鑑み、必ずしも国家的生活の本質的部分を構成する働きではないと、彼は懸念していたのである。

(2) 「部分」 *μέρος* と「全体」 *ὅλον*

アリストテレスは『形而上学』第5巻第25章と第26章の両章で、「部分」と「全体」の意義を詳しく分析している。両概念は不可分な対概念でもあるのでここでまとめて述べておく。まず「部分」にはいろいろな意義があることを列挙しているが、第3番目と第4番目の意義を取り上げる。③「それらにまで全体が分割されるところの、あるいはそれらから全体が合成されるところのそれらを、この全体の部分という」¹³⁾。ここでアリストテレスが

「全体」というのは、形相 *εἶδος* または形相を含む結合体 *σύνολον* のことを指している。したがって、結合体の部分とは形相と質料である。青銅の球における球形は形相であり、青銅は質料である。*σύνολον* は全体を内部にあって共に構成する部分の結合体であるのに対し、先に述べた協働原因 *σύναιτιον* は存在体を外部にあって共に支える要因である。次に、④「それぞれの事物の本質を明らかにする説明方式の要素〔類と種差〕も、その全体の部分である」¹⁴⁾と言う。一面から見れば、種は全体の類を構成するクラス単位の部分であるが、他方から見れば、個の実体の本質は、一般的な類に種差を加えて限定していくことで得られるがゆえに、類は、豊かな内容を持つ個の実体を構成する抽象的普遍的な部分でしかないことになる。

ところで「部分」に対する「全体」とは、「① 全体が自然的にそれらから成っているとされることのそれら諸部分のいずれの一つもそれには欠けていないそのこと、および ② その内に包含される諸部分が或る一つの統一的なものであるようにそれらを包含するところのそのことである」¹⁵⁾と規定される。①の場合は、多くの個別的なものを共通に述語する普遍的概念の意味であるのに対し、②は、諸部分を「一」に向けて統一する「形相」、あるいは「現実態」の意味である。この意味は第23章の「持つ」*ἔχειν* (エケイン) の項で説明されている「一緒に保有するもの」*σύνεχον* という意義によって補えば分かりやすくなる¹⁶⁾。ある存在体を構成する諸部分は「一」*τό ἓν* によって保有されており、この「一」が欠ければ諸部分は分離して、名称のみ同じでも実態は全く異なったものになってしまうという意味である。たとえば、『政治学』で言われるように、「全体としての肉体が壊されると、人が石の手と言う場合のように、同じ名称で言うのならともかくも、そうでなければ、手も足もないであろう」¹⁷⁾。身体から切断された手はもはや手とは言えない。自然(本性的)には、全体はそれを構成する諸部分よりも「先立っている」。このことは国あるいは家と個人との関係についても当て嵌まる。国は国民を「持つ」が、国民は国から切り離されたときには自足的でなくなる。アリストテレスはこの関係を「部分が全体に対するよう

な関係」と述べている。共同することのできない者、もしくは共同を要しない者は「国の部分ではない」という言葉は、この文脈で記されている¹⁸⁾が、全体である「一」は、あたかも有機体のように諸部分に浸透して、生命を賦活する実体であることが知られる。

「家」は家族に生存を保障する働きを有する基礎的な共同体であるが、家族の集まりである「国」は「善き生」を保障する「共同体」の最高の現実態である。部分は集合して全体となるが、このできあがった全体は、これらをさらに部分として保有する全体から見れば、部分でしかない。このように部分と全体は連続的階層をなしており、その名称の差異はそれぞれ形相の差異によって生み出されている。最も広いコイノーニアの上に、政治的コイノーニアであるポリスが成立するが、ポリスはそれを構成する部分である「国民」と「非－国民」とに分けられ、国民の中でも国事の枢機に参与する「能動的国民」が国の魂部分をなす。この能動的国民の範囲の広狭に応じてさまざまな国制が区分されるわけである¹⁹⁾。

3. 共同体の構成部分と協働原因

以上、アリストテレスの政治学は、深く形而上学的な概念を下敷きに叙述されていることを垣間見た。それでは次に、上述の議論を踏まえ、国もしくは家の構成部分と協働原因は具体的には何であると語られているかを問題としよう。『政治学』第7巻第8章では、以下のように述べられている。「自然によって構成された他のものについて見るに、その全体がそれなくしては存しえないところのそれは必ずしも全組織の部分ではない、従って同様に、国にとって是非存しなくてはならぬものも必ずしもその部分とすべきではないことは明らかである。また、その構成部分が何か一つの類（ゲノス）をなしているところの他の共同体においても、このことは同様である。……この是非存しなくてはならぬものというのは、例えば食糧とか、或る広さの土地とか、何かそういうようなもののことである」²⁰⁾。この文において、アリストテレスは、自然のあらゆる産物に二つの要素があることを分析して、事物

の部分と、事物の必要条件だが、事物の部分ではないものを区別していることが分かる。国家についても同様のことが言えるわけで、同じ住民でも、国家の実体をなす部分と国家の単なる必要条件である要素に分けられる。一般に、国を含む共同体 *κοινωνία* において、「全体」を構成する「部分」*μέλη* と全体の維持に「不可欠の条件」*ὅν ἄνευ οὐκ* とに区別される。*ὅν ἄνευ οὐκ* とはラテン語にそのまま訳せば、*conditio sine qua non*、すなわち「必要条件」のことである。共同体の定義においてその本質を構成する要素が「部分」であるのに対し、その存在維持に必須のものであっても本質でない要素は「部分」ではなく、外側に立って協働する原因であるとされる。

プラトンは、物質あるいは必要性と精神あるいはイデアを鋭く対立させ、後者に比類ない意義を認めたが、アリストテレスはむしろこの緊張を緩和し、必要性をも考慮の範囲へ引き入れる。彼は、国を構成する部分と「国がそれなくしては存しえないところのそれ」にはどのようなものがあるかを列挙し、食糧・技術・武器・国内での入用と戦費を調達できるだけの金員・神に対する配慮・利益のあるものや、国民相互の間の正しいものについての判定の六つ²¹⁾を、自足的な生活をするのに必要なものとしている。つまり、これらを調達する、あるいは携わる仕事は、耕作者・職人・軍人・富裕者・神官・議員もしくは裁判官たちによって担われる²²⁾。彼はこの結果を踏まえて、第9章で「農耕者たちと職人たちと日傭取り達とは国に是非存しなければならぬものであり、戦士たちと議員たちとは国の部分である」と結論している。言い換えれば、最善の国の「国民」は、食糧を供給する部分や技術を用いる部分や金を調達する部分に属してはならず、武器を用いる部分、神事を行う部分、国事を行う部分に属する²³⁾。この規定において、「国民」の範囲は、国の本質定義から導かれていることが分かる。最善の国制とは、それによって国民が最も幸福であるものであり、幸福とはアリストテレスによれば徳なしには存しえないということが、国制の基礎原理であるから、その「部分」である国民は、俗業や商業さらには農耕の生活を送るものであってはならないことになる。本稿が主題とする取財術に携わる多くの者はまさに

商人であるが、彼の商業観をここにひとまず確認しておこう。

今、国における「部分」と「不可欠の条件」(＝必要条件)について述べたが、次に、家における「部分」と「不可欠の条件」とについてアリストテレスが論じているところを見てみよう。それは『政治学』第1巻第3章以降に関わる。大雑把に言う、家の最初で最小の部分は主人と奴隷(主従関係)、夫と妻(婚姻関係)、親と子(子供づくりの関係)であり、財産も第4の部分と考えられる。しかしながら、彼はこの議論をもっと詰めて、「所有物」*κτῆμα*という言葉は「部分」という言葉と同じように用いられるが、正確には「他のものに属するもの」の意味であると明別した²⁴⁾。ここでわれわれは、ある全体の「部分」と「下屬」*ὑπηρετική*の概念が区別されていたことを確認する。彼によれば、所有物は生活の道具であるが、道具の中でも生なきものと生あるものの二つがある(*τῶν δ' ὀργάνων τὰ μὲν ἄψυχα τὰ δ' ἔμψυχα*)。奴隷はその道具の中で「生のある財産」に属するものとして、所有財産 *κτῆσις* とともに、「家」の「部分」から除外され、それに下屬する。ただし奴隷は行いをなすための下働人であるがゆえに、物作りのための所有財産全体の中でも、「その他の道具に先立つ優れた道具」であると位置づけられる。奴隷とは「人間でありながら、その自然によって自分自身に属するのではなく、他人に属するところの者」であり、そして「他人に属する者というのは人間でありながら所有物であるところの人間のことであり、所有物というのは行いのための、しかもその所有者から独立な道具のことである」²⁵⁾。

これに対し、われわれがテーマとする取財術は、「生ける財産」である奴隷にではなく、生活の必需品の調達に関わる。必需品がなければ善く生きるどころか、生きることさえできない。問題はこの調達の仕方の倫理的評価である。家政術の中でも、無生物の財産の取得よりも家族構成メンバーの支配の方が価値的にはもっと重要な課題であり、アリストテレスは第1巻第12章と第13章で考究している(ちなみに奴隷論は第3章から第7章まで)が、取財術が家政術の**部分**であるか、それともそれに**従属する術**であるかの議論は第8章から第11章まで論じている。いわゆるアリストテレスの「経済思想」

の基本はここで集中的に展開されている。なかでも彼の商業に対する見解や、貨幣ならびに利子に関する見解が重要である。次に、家政術と取財術との関係を彼はどのように考えているのか、まずその概念理解と問題提起を取り上げよう。

第2節 家政術と取財術

アリストテレスは『政治学』第1巻で、奴隷も財産の一部であることを示した後で、あらゆる種類の財産とそれらを獲得するさまざまな術について述べている。問題提起は、(1) 家政術と取財術（獲得術）との関係はいかにあるか、(2) 家政術の中で認められる取財術とはどういうものに限られるか、に関わる。最初の問題は次のように立てられる。

(1) 「取財術が家政術と同じであるか、あるいはその一部であるか、あるいはその**従属的な術**であるか、そうしてもし従属的なものならば、梭を作る術が織物術に従属するような意味でそうであるのか、それとも冶金術が彫像術に従属する意味でそうであるのか、ということであろう（何故なら両者は同じような意味で従属するのではなくて、一方は道具を供給し、他方は材料を供給するのだからである。ここに私が材料というのは、一つの作品が**それから作られるところの基体**を指すのである。例えば織物術に対する羊毛、彫像術に対する銅の如きものである）」²⁶⁾。

この問いに対する彼の答えはこうである。「家政術が取財術と同じでないことは明らかである（なぜなら、後者のなすところは**供給**することであり、前者のなすところは**使用**することであるからである。——何故なら、いったい、家政術の他に、家にあるものを使用する術は何があるであろうか）」²⁷⁾。ここに家政術は**財の使用**に関わるのに対して、取得術は使用されるべき**財の供給**に関わるとの区別が立てられていることを認識しうる。この区別は**形相と質料（＝基体）との区別**、もっと言えば、**エネルゲイア（現実態）とデュナミス（可能態）との区別**に対応することを押さえておこう。供給によって財を

所有し、この財を使用することによって、ひとは生存し、さらには善く生きることができる。「所有」(クテシス) *κτησις* と「使用」(クレシス) *χρησις* の概念は、アリストテレスにおいて対概念として用いられることに注意する必要がある²⁸⁾。職人が道具を使用するのに比論して、魂は身体を使用すると言える。ここに外的財が加わると、職人は道具で製作するための材料を用意されていなければならないように、魂もまた結合体として幸福を実現するためには外的財が補助手段となると言っている。自分の所有する財産は道具のように意のままになるが、正しく用いない場合には害悪をもたらしかねないがゆえに危険である。したがってひとはいかにして財を調達するかを知を所有するのみならず、それを適正に使用する知、もっと言えば徳を持たねばならない。財を獲得する技術知と財を使用する倫理的徳とは異なる。

彼は、第7巻第13章で「幸福とは徳の完全な実現と使用 *ἐνέργειαν εἶναι καὶ χρῆσιν ἀρετῆς τελείαν*、しかも条件付きのそれではなくて、条件ぬきのそれである。ここに私が『条件付きの』 *ἐξ ὑποθέσεως* それと言うのは『必要止むを得ざること』 *τὰναγκαῖα* に対する使用を指すのであり、『条件ぬきの』 *ἀπλῶς* それというのは『立派に』 *καλῶς* 使用することを指すのである」²⁹⁾と述べている。ここにいう「条件」は「必要」に対応し、「条件ぬき」は、外的事情を右顧左眄せず物事の本質に端的に入り込む態度を指すがゆえに「立派な」と言われる。それゆえに外的財を幸福の原因であると信じ込むことは、「立派に琴を弾ずることの原因は術よりも琴にあるとするようなものである」³⁰⁾。下手な演奏家ほど自分の技芸のほどはさておいて楽器の良し悪しをあげつらう。取得術は生活に必要な財の供給を図る術であるが、運不運もあって財の多寡も生じるであろう。しかし家政術は、この今手中にしている所得を前提としていかにして有徳な生活を送り送らしめるかを思慮する術であることに対比できる。

しかし、彼はいったんこのように答えながら、取得術が家政術の一部であるかどうかについて「論争の余地」があることに注意を喚起して、取得される金銭や財産がどこから得られるか、またどのような部分を含んでいるか

を考察することが肝要であるとした。この考察は、取財術あるいは獲得術 *κτητική* の中でも家政術の部分であるものと家政術に属さない術との区別の設定に導く。この議論は(2)に関わる問題である。

(2) アリストテレスは、財がどこから得られるかを考察することが取財者の仕事であり、財が多くの部分を含むとすれば、まずはこれらの部分を問うことが先決問題だとして、財の内で第一にして最も必要な部分から始めるべきだと言う。それは**食糧に関する配慮と獲得**である³¹⁾。衣・住も必要だが、温暖な気候では、それがなくても生存できるが、食糧なしでは生存できない。ところで、食糧には多くの種類があり、動物や人間の生活にも多くの種類がある。食糧の相違は動物の生活法に相違をもたらし。草食獣か肉食獣か雑食獣かで、群居生活を営むかあるいは分散して生活をする。自然は生活のしやすいように、またいろいろな食糧を得ることができるよう、それら動物の生活を区分した。自然に应じて快いものはそれぞれ異なっている。

人間生活においても同様のことが指摘できるのであって、食糧の得方に应じて違いを生じる。アリストテレスは、三つの生活法を分類し、**牧畜・猟・農耕**を挙げた³²⁾。牧畜は、慣れた家畜から財を得る最も骨折不い仕方であるが、ただし畜群に合わせて牧草を求めて漂わねばならない。猟には、海賊と漁撈と狩猟とが区別される。海賊は当時一種の職業として認められていた。漁撈は、湖・沼・川・海の近くに住んでいる者に適していた。またある人びとは鳥や野獣の狩猟によって生活をしていて。しかし、人間の最大の部分は農業を営み、土地の耕作と栽培された果実によって生きる。

ところで「これらは、自分で働く仕事を持ち、交易や商売によらないでその食糧を獲得する生活である。すなわちそれは牧畜者、農夫、海賊、漁夫、狩猟者の生活である」(もっとも、これらの生活を混ぜ合わせて、つまり足らぬところのある生活は補充する仕方できている人びともいることも指摘している)³³⁾。ここでアリストテレスは、ひとまず取財法に二通りあることを示唆している。それは食糧を自然から調達する方法と、他人との交易を通じて調達する方法とである。前者はいわば「自然的取財術」とでも名づけられる方法である。命

を支えるに必要な財は自然によって動物や人間に与えられている。動物は子を生んだとき、食糧を自分で調達できるようになるまでは事欠かないだけのものを一緒に生み出す。胎生動物は、乳をある時まで自分自身の内に持っている。動物が成長した後は、植物は食糧として彼らのためにあり、他の動物は人間のためにあり、そのうち家畜は使用や食糧のために、野獣は食糧のため、あるいは衣服等がとられるために存する。アリストテレスによれば、戦争術も自然によって取財術に属するとされ、動物に対し、あるいは生まれつき支配される方が適している人間（＝自然的奴隷）に対しても用いられる。こうした生活連鎖の根底には彼の有名な目的論的自然観がある。すなわち、「自然が何ものをも無目的に、あるいは無駄に作るものでないならば、人間のためにそれらすべてを自然が作ってくれているのでなければならぬ」³⁴⁾。

アリストテレスがここで用いる「自然」に従った取財術というところの「自然」*φύσις* とは、彼が哲学的に用いる「事物の発展過程において完全性に達した目的」という意味ではなく、事物の目的論的体系の内、**原初的な芽生えの段階**の意味で語られていることに注意する必要がある。それは事物の発展がそこから起こる「起源」という意味である。ともあれ(1)の問題について「獲得術の或る種のものは合自然的に家政術の一部なのである」³⁵⁾ *ἐν μὲν οὖν εἶδος κτητικῆς κατὰ φύσιν τῆς οἰκονομικῆς μέρος ἐστίν* と規定される。「生活に必要で、家や国の共同体に有用であって、しかも蓄えうる財のすでに備わっているのを見出すか、あるいは備わるように自分自ら準備しなければならぬ限りの」術が家政術である³⁶⁾。この種の財は自然によって人間にその需要を満足させるために属する。人間はこの目的のために家という共同体を形成するので、そうした財は家に属する。そのような取財術は当然に家政術に属する。ところで家は国のためにある。必需品の供給は単なる生活のためではなく、善き生活のために足りるのでなければならない。これが、アリストテレスの称揚する「真の富」*ὁ ἀληθινὸς πλοῦτος* である。

それでは「真の富」と呼ばれるのはどのような条件を備えていなければならないだろうか。彼は「富に限りがないことをうたった」ソロンの詩に対す

る批判を手がかりに、以下のように記している³⁷⁾。

- ① 「善き生」への観点を持った「真の富」の自足性は、無限ではない *οὐκ ἄπειρός*。
- ② 「真の富」は限りを持つ財である。それゆえに真の富はこの種の財よりなる。誰も、善く生きるために、無限の食糧や衣服や奴隷を所有する必要はない。
- ③ いかなる術の道具もその数や大きさにおいて限りがある。
- ④ 家政家や政治家が合自然的に用いる道具の総量には限りがある。

ここで登場した「限り」*πέρας*は、倫理的規範の意味を持たされている。アリストテレスにとって、無限*ἄπειρος*、すなわちきりが無いということは思惟できず不合理である。これも形而上学的意味を帯びた言葉である。この研究は「原因」の種類を分析した『形而上学』第2巻第2章で、次のようになされている。「生成が**そのために**あるであるところの**それ** [すなわち生成の目的] は、その終わり *τέλος* である、しかしそれは、**他のなにものかのために**ではなく、かえって他のものどもが**そのために**であるところの**それ**であるからして、したがって、もし何か終局的なものがあれば、その生成過程は無限ではないであろう、しかし、もしそのようなものが存在しないなら、そのためにである**それ** [目的] は存在しないことになろう、のみならずこの系列を無限であるとする人々は、知らず知らず善の真相 *φύσις* を無視することになる、——しかもなんびとも、ある限界に到達しようとの期待なしには、なにごとを行為しようとしもないものなのに、——それでもなおそのような人があるとすれば、それは理性が欠けているからであろう、いやしくも理性を有する者は、なにかのために行為する、そしてこのなにかが限界であり、目的は限界であるから」³⁸⁾と記述されている。

あらゆる術はその目的の追求に関しては限りが無いが、目的に達するための手段を限り無く求めたりすることはない。医術は限り無く健康を求めるが、この目的のために医薬品を限り無く使用することはない。この目的の観点から見て限度が置かれる。真の富、家政術の追求する富には、限りがあ

る。その目的は富ではなく善き生であり、それが得る富はこの目的のためにあるからである。無限の富を獲得することは家政術の仕事ではない。道徳的生活の手段である富は総量において限界がある。この限界は中庸によって指定される。すべての技術は一定の数の道具と定まったサイズを有するものだが、経済術としてその例外をなすものではない。家政術の一部である真の取財術において追求する富に限りがあるということは、その反対、限り無く富を追求することは家政術から逸脱した行動を意味する。道徳的あるいは政治的生活の目的を超過する富は抑制してもよいことになる。アリストテレスによれば、「貨幣」 νόμισμα の形での財は限りが無い。限りを持たない唯一の他の財は、貨幣である。かくして、獲得術には別の種類のものがあることとなる。それは限りの無いもので、お金に関する。「商人術」 καπηλική と呼ばれるのがそれである。

彼はこれらの取財術を次のように二つに区分している³⁹⁾。

① 自然によって φύσει あるもの

② 経験と術によって δι' ἐμπειρίαν τινὸς καὶ τέχνης 生まれるもの

①の財産術もまた狩猟・漁労・農業等、経験と術を要するが、その取り扱う物資は、自然によって術なくして存在するものであって、はじめて生み出すものではない。大地に種の世話を委ねて自然から (ἀπὸ γῆς) 収穫する。

②の財産術は、商品を売って利益を得る、あるいは金を貸して利子を得るといったもので、労働の報酬が自然から得られるのではなく、他人から (ἀπ' ἀλλήλων) 取得される。このことを説明するために、アリストテレスは所有物 κτήματα について、固有のものと固有でないものとの異なる「用」 χρῆσις を区別した。「例えば、靴には靴としてはくという用と交換品としての用とがある。両者いずれも靴の用である。というのは、靴を欲するものに対して、貨幣や食糧と引換にそれを与える人でも、やはり靴を靴として用いるのだから」⁴⁰⁾。すなわち物には使用価値と交換価値がある。こうした交換は、自然的な勢いから「人間たちがあるものは充分以上に持ち、或るものは充分以下に持っているという事情から起こった」。しかしながら、彼によれ

ば、靴の交換はあくまでも固有の用い方ではない。「何故なら靴というものが存在するに至ったのは交換のためではないからである」。それにも拘らず、「すべてのものが交換術 *μεταβλητική* の対象となりうる」ところに問題が潜在する⁴¹⁾。

アリストテレスは、交換における財の使用と、交換さるべく財を作ることとを区別し、使用価値は本質的に質的・異型的であるのに対し、交換価値は量的・同型的であり、両者は論理的に見て異なった種類であると特徴づけたうえで、前者を容認して、後者を批判する。交換のための財の使用は、財が交換のために作られているのではないという意味でその固有の使用ではない。しかし、自然的に充足した生活を確保するために、お金や食糧と交換することで、靴を欲している者に靴を与える者は、靴を靴として使用していると言える。それは売却のみを主目標として靴を製作しているのではない。交換における靴の言ってみれば「副次的な」使用は認められるのである⁴²⁾。

ところが固有の用い方ではない交換術は、人間の発明した貨幣を用いることによって影響力を倍加する。この貨幣の使用目的によっては、固有の用い方ではないが一応は認できる財の交換は、評価が否定的となりうるのである。今日にいう取財を理解するためには貨幣の理解が必要であり、貨幣を理解するためには交換行為というものの核心を理解する必要がある。貨幣は動植物のように自然によって存在する物ではなく、交換を容易ならしめるために発案されたのみならず、富を蓄積する機能をも併せ持つところに問題をはらんでいる。最初、貨幣を用いる交換は必要止むを得ざるものであったが、貨幣による取財術は、商人たちの経験と技術による成果として、そこから「形相を異にする」別種の取財術 *θάτερον εἶδος τῆς χρηματιστικῆς* が生まれた。これが商人術である。

アリストテレスが商人術の定義に関して述べているところによれば、「商人術が生じたときはおそらく簡単なものであったであろうが、のちに人が経験によって、どこから、また如何なる交換によって最大の利益をあげ得るかということを知るや、さらに一層技術的なものになった。ここからして、取

財術は主として金に関係するものであり、そしてその術の機能はどこからたくさんのお金を得られるかをみてとることのできることに思われている。なぜならそれは、富や財を作るものだからである。そうして実際、ある人びとは富をしばしば貨幣の総量だとしている。それは取財術や商人術が貨幣に関係しているためなのである」⁴³⁾。このような「商人術は財を作るもの、それもあらゆる仕方によってではなくて、ただ財の交換によってのみ作るものである。そしてこれは貨幣に関係するものだと思われている。なぜなら貨幣は交換の出発点であり、目的点でもあるからである。そしてさらに、この種の取財術から生ずる富には限りがないのである」⁴⁴⁾。まさしくその目的というのは間違った種類の富であり、財の獲得である。ここから彼は、財に交換価値しか認めない商人術は、自然にかなった取財術、したがって家政術の仕事ではないと明言した⁴⁵⁾。

かくして、上述の二種の取財術の内、**自然的取財術**は必要欠くべからざるもので、賞賛さるべきものであるのに対し、商人術は人間が相互から財を得る交換的なもので、非難せられてしかるべきものとされる。なぜなら、それは自然に合致したものではないからである。彼は、卸売・小売りを営む商人を、農民や牧人に比べて下賤なものとした。商人の仕事が有徳な生活と関連を持たず、金儲けのために詐略を用い貪欲へと逸脱する危険性をはらむからである。われわれはこの術を**不自然的取財術**と呼ぶことにしよう。

前者は家政術の一部であるが、後者はそれに含まれない。しかしふつうに「取財術」と言われるのは後者の方である。家政術と後者の意味での取財術は互いに異なっているが、それにも拘らず同一のことに関連している。それというのも、いずれも交換における財の使用という側面を持つからである。ただし、財の使用であっても同じ観点からの使用ではない、言い換えれば使用の目的は同じでない。つまり形相を異にしている。家政術においては、貨幣は必要な財を調達する交換の媒体でしかなく、財の使用における自然的自足性を目的点に持つので、富に限りがある。家や国において高貴な生のための自足手段を提供するに止まる。これに対して、商人術は、蓄財を目的とす

るもので、富は本来限りを有するものでありながら、取財に携わる人びとは、富をあたかも限りが無いかのように追い求めることが見られる。貨幣の増殖が家政術の目的と混同される。

貨幣の無限増殖を絶えず思う欲望は無限であり不定的であるから、それを満足させる手段もまた無限に追求する。善く生きることの目標を肉体的享樂に置くとき、これらは財や富の内にあると考え、その過剰な愛が富を過剰に追求させ、第二種の取財術を生み出す。もし取財術によって過剰な富が得られない場合は、別のことから、たとえば、勇敢を求める将軍術や健康を追求する医術から、それらの自然的な目的に背反する仕方で、金儲けの手段に作り替える。実際すべての術は、この目的に答えるものであり、金儲けに仕えねばならないと思うに至る。再度、二つの取財術の区別を以下に確認しておこう。

- ① 本性によって家政に固有に属しており、食糧に関心を寄せ、限界がある。
- ② 不必要な種類で、家政に固有ではなく、家政とは独立の術であって、食糧よりも貨幣に関心があり、限りがない。われわれの必要とするものではないが、善く生きることよりも身体的快樂により関心を持つことにその存在理由がある。

さてアリストテレスは、第 11 章で、上述の取財術を具体的にいくつかの種類に分けそれらの相対的な収益性や価値について述べ、もって支配者がその間を正しく判断し、必要なあるいは適切なことのみを命令できるようにした。以下にその概要をまとめて紹介しておく⁴⁶⁾。

- (1) 本来の意味での正しい取財術の部分；自然から直接必要物を得る方法
 - ① 家畜について（牛，馬，羊等の所有に関する経験知）
 - ② 農業（穀物の耕作と果樹の栽培），養蜂，狩猟，漁撈に関する経験知
- (2) 交換的取財術の部分
 - ① 海外貿易 *ἐμπορία*（船貸，運送，商品の陳列）；リスクと収益に関し

て相違

② 金貸し；貸して利子をとる（お金をお金に交換）

③ 賃金取り *μισθαγνία*（職人的技術的なものと技術を要せず肉体のみ用いるもの）

金銭的收益と利子を求める取引は不自然である。賃労働（労働をもってお金に換える）も同じく不自然である。そのようなことは、最善の国制では存在しない（取引と貨幣は必要物に関してのみ行われ、労働は奴隷が行う）。

しかし他の国制では存在せねばならないかもしれない。

ところで、アリストテレスは、最後になって唐突な感がないでもないが、前二者の中間に**第三の種類の取財術**があることを指摘した⁴⁷⁾。それは、自然に合致した取財術と交換的取財術との双方の部分を持つものとされる。大地から有用なものを得ることでは自然に従う種類に似ているが、穀物や動物のあり方のように直接有用であるわけではない。かえって、これらの有用な事物は、第二種の貨幣のように「非生産的」である。彼が挙げる例によれば、伐材や採鉱術がそれに当たるといふ。使用に供せられるために前もって多くの仕事（鋸で挽いたり溶解したりすること）を遂行せねばならない。さらに、家財道具とみなされるものが生産される前に職人によって寝台や鉢や剣などに精巧に製作されねばならない。この種の取財術は、直接の有用さからいくばくか隔たるが、自然から事物を得るがゆえに、不自然的であるとは言えない⁴⁸⁾。

さてこの種の取財術を業務全体の中でどのように位置づけたらよいかという問題が残るが、これを考えるに際して手がかりを与えてくれるのが、ハナ・アーレントがその著作『人間の条件』の冒頭に定式化した、労働 labor・仕事 work・活動 action の区分である。そこでは「労働とは、人間の肉体的生物学的過程に対応する活動力である」。「仕事とは、人間存在の非自然性に対応する活動力である」。「活動とは、物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる唯一の活動である」⁴⁹⁾。このように規定したうえで、この三つの活動力につき次のように展開する。「労働は、個体の生存のみなら

ず、種の生命をも保障する。仕事とその生産物である人間の工作物は、死すべき生命の空しさと人間的時間のはかない性格に一定の永続性と耐久性を与える。活動は、それが政治体を創設し維持することができる限りは、記憶の条件、つまり、歴史の条件を作り出す⁵⁰⁾。こうした説明はまだ抽象的であるが、別の箇所では種々に述べられている言葉を補えば、その言わんとする内容が明確になる。彼女はこの三つの業務に携わる人間をそれぞれ、「労働する動物」animal laborans、「工作人」homo faber、「政治的動物」animal politicus と称したが、古代ギリシア人の慣用語とのつながりで言い換えている箇所によれば、労働するとは、*πονεῖν*、すなわちそのつと肉体をもって骨折つて労働するという意味を含むのに対し、仕事をするとは、*ἐργάζεσθαι*、すなわち技術をもって永続する製作品を残すという意味を持つ⁵¹⁾。ポイエーシス *ποίησις* がこれに当たる。これらは生命の必要から免れるために人間が従事せねばならない業務であった。この必然性を克服することによってはじめて、人間の本質をなす「自由」が実現できると信じられた。活動するとは、まさにこの自由であることであり、それは政治活動 *πολιτεύειν* において端的に現れる。なぜならここに、肉体の必要から離れ、知性自らが「始まり」となって「支配し導く」*ἄρχειν* 行為と「活動をし果せる」*πράττειν* 行為とが統合されるからである。プラクシス *πράξις* がこれに当たる⁵²⁾。労働と仕事は、単なる生存のための「人間の条件」human condition であるのに対して、知慮をもって政治に携わる行為こそが、善く生きる「人間の本性」human nature を実現するのである（ただし、ヌースとしての知性は「人間を超える」何ものかである⁵³⁾）。彼女が行ったこうした区別の視点には、『倫理学』で重きをなした知性 *διάνοια* における知慮 - 技術の区別があることも付言しておこう。身体を用いる「手工業者」*χειροτέχναι* は、まだ知性の活動を妨げる質料にとらわれる働きに従事している限り、人間本性の現実態に達しないのである⁵⁴⁾。

以上の考察に従えば、アリストテレスが第三種の取財術と名づけたもの、つまり自然的取財術と交換的取財術の中間にある、さらに言えば自然的と反

自然的との中間にある術とは、アーレントが言うところの「工作人」の担う業務を指すと考えられる。製作ポイエシスとは、人為的な自由企画性を持つにせよ、自然ピュシスを物という作品において統合する限り、「自然法則」の必然を無視することはできない。これに対して、第一の取財術が「労働する動物」の業務を担当するものと言えるのではなからうか。後者は農林水産業であり、いわば第一次産業であるのに対し、前者は地下資源を取り出す鉱業と、鉱産物や農林水産物などを加工する工業を含む第二次産業のことを指すものと考えられる。これらに対し、政治活動は肉体を用いる業務というよりも官職に就く者の知的な精神活動である。わが国の江戸時代における士農工商の身分制度は、同時に職分制度でもあった（もっとも、「士」は政治的職分を果たすと同時に軍事的な職分をも担ったが、生存の直接的需要を満たす稼業には従事しないのが建前であった）。アーレントが言う三つの活動生活とは、まさに士農工商の「士農工」に相当するであろう。とすれば最後に問題となるのは、「商」の位置づけである。商業は、ふつう、運輸業やサービス業を含む第三次産業に分類される。アリストテレスは、農業に代表される自然的取財術や「不自然とまでは言えない」とした製造業に対し、交換的取財術を区別して立てたが、商業はここに属するであろう。そして、この商業は「反自然的な」取財術とされたのである。

アーレントの規定によれば、「活動 action とは、物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる」活動であるが、その範型は政治的活動によって与えられるものであった。この規定に従う限り、商業活動をプラクシスに含めることはできない。しかしながら、それは自然から直接間接に手を加える業務に従事するのではないにせよ、アーレントの規定を準用すれば、「物あるいは事柄の介入をもって間接的に人と人との間で行われる」活動であると言えるのではあるまいか。交換は人間の物に対する関係であると同時に、人間間の関係でもある。ある物が一方にあり、他方にないとき、かつこの他方がその物の需要を持つとき、交換が起こる。商人は財の生産者ではないにせよ、自足的生活のためこうしたサービスを行うことで骨折することは確

実である。ある財が消費者に届くためには、製造業や農業に従事するにも劣らない「才知」、すなわち賢い clever 商才が必要である。それは損失のリスクを賭けた労苦に満ちた知的活動である。こうした骨折りに対する報酬は詐取的なものではなく、正当な業務であろう。およそ仕事は、社会に貢献する職分的意義があるとともに、個人的な利得の側面を有する。こうした仕事は、精神的な意味を含む action とは異なり、behavior と名づけられよう。「工」に携わる職人が、homo faber ならば、「商」に携わるビジネスマンとは homo oeconomicus である。

さて問題は、このような商人の行動をどのように評価するかである。交換過程を仲介する商人は「寄生者」であり、そうした地位の性質によって徳から逸脱した者とするのは正当であろうか。仲間の必要物を餌食とすることで彼らから儲けを得ることは確かに道徳的に見て非難に値しようが、「才知」自体はひとまず善悪に中立である。決定的なことはその才知をどのように使用するにかかっている。アリストテレスに帰せられる賤商思想の評価は、本人の陳述に否定できない論拠を有してもいるが、別の面から再度見直す可能性がないわけではない。そのためには、商業の要をなす「交換」とそれを媒介する「貨幣」の本質を彼がどのように見ていたかを確認することが肝要となる。

第2章 アリストテレスの交換的取財術

アリストテレスは、交換の諸形態とその変化の過程を、物々交換から始まって、貨幣による交換へ、それから商人による貨幣蓄積のための交換へ、最後に、利子を得るための貸金へとたどっている。ここには強い理論的統一性があると同時に、自然的なものと非自然的なものという倫理的基準が導入されている。「自然的なもの」とはしかしながら、第一に、物事の「始まり」という意味と同時に「終わり」という両義を含む。「終わり」が目的をなす

のであって、物事の生成が正しいか逸脱しているかの評価基準となる。第二に、彼は人為であるノモスとの対立において、自然であるピュシスを捉える。このピュシスはノモスと断絶しているのではなく、デュナミスからエネルギーゲイアへ向かう過程をたどる。この過程で、ノモスはピュシスを顕現することに仕えるのか、それとも逸脱した方向へ転じる悪因となるのかが問題となる。伝統的な自然法論で言うならば、実定法は自然法を完成する働きを持つ限りで正しいとされ、明らかに反するのであれば無効であるとされた。このことは経済論で言えば、ノミスマと呼ばれる貨幣が、自然的供給を目的とする取財を完成する働きを持つか否かで評価が左右されると、一応推測する。ここで問題となるのが、財についての倫理的基準をなす「終わり」としての目的という自然概念である。財は所有（クテシス）においてではなく、使用（クレシス）においてその目的が与えられるという指針が、われわれが得た暫定的な結論より推測されるさしあたっての考察方向である。彼の商業観もこうした観点から理解することができる。

われわれは交換の諸形態を整理するうえで、グラスゴー大学の S. メイクルがその著作『アリストテレスの経済思想』で用いた四つの図式を援用しよう。それは ① 物々交換、② 貨幣を媒介する交換、③ 財を媒介する貨幣蓄積、④ 財を介しない貨幣増殖と要約できる。②ではじめて登場した貨幣は単なる価値尺度・流通手段といった名目的意義しか持たないが、③の商業活動から④の高利貸しに及んで、それは価値貯蔵機能を有する実質的な追求目的となる。彼は、マルクスの価値形態論を連想させる仕方では、以上の四つの交換形態を、① $C-C'$ 、② $C-M-C'$ 、③ $M-C-M'$ 、④ $M-M'$ と表記した⁵⁵⁾。C とは「商品」commodity、M とは「貨幣」money の略記である。アリストテレスは、このように変遷する継続的な形態を通して、交換の進化を分析した。この分析で肝要なことは、交換の諸形態を、ポリス共同体の目的・テロスに向けて明らかにすることである。以下、交換価値の本質、交換の進化の過程、そこでの貨幣の役割、ポリスにおける倫理や政治に対してこの「進化？」が及ぼす影響関係を明らかにして、アリストテレスの商業

観を見ることにしよう。

第1節 交換的取財術の諸形態

1. 物々交換 (C—C')

アリストテレスによれば、家 *oixía* は「日々の用のために」自然に即して形成された。その成員たちは「食卓を共にするもの」と呼ばれる。しかし「日々のでない用のために」できたのが村 *κώμη* である。村は分家によってできたので、村人は「同じ乳を呑んだもの」と呼ばれる⁵⁶⁾。こうした村落共同体の中で古代人は閉鎖的な自給自足生活を維持してきた。そこで重視された共通の血筋は、祭祀の相続と家産の継承を重視せしめる源であったと考えられる。大家族は血縁団体であると同時に経済団体であり、生産の場所であり消費の場所でもあった。そのような「家」の存続の確保、直接には家産の保全是、家族構成員が自由であることの条件であった。この自給体制が限界に近づくと、今度は血縁を持たない他の部族との婚姻のよしみを通じることで、同じ部族仲間として拡大した共同体を作り、自給自足の生活を継続できるようにした。

多くの部族を抱える村落共同体では、効率化を目指して生産は分担によって行われたため、異なる物財が生産され、また生産された物財の過不足の問題も生じたので、それらの交換 (*μεταβολή*) が行われる。K. ポランニーによれば、市場経済への転換期にあったアリストテレス時代の古代ギリシアでは、交換は必ずしも経済的意味のものではなく、A が B に対して報酬となる財を提供すれば、B は A に対して返報する義務を生じるといった社会的意味のものであった⁵⁷⁾。ある家族が、その特技をもって生産した財を、それを必要とする他の家族へ分与する。後者の家族が前者の家族の必要な財を持っていれば同時に物々交換が行われるが、持っていなければいつか見返りがあるだろうという信用のもとに一方的な贈与があるのみである。しかし共同体の不文律に従って、恩恵を受けた家族はある程度の時差を経たのち、感

謝の気持ちをもって、贈与してくれた家族の必要なものを作りお返しをする。彼はこれを「互酬性」の原理と呼んだ。

経済的交換の場合、事前の合意あるいは契約に従って等価の財を返済することで満足するが、社会的交換では、返報する側の気持ちが相手方にもどう伝わるかが肝要となる。即座にお返しすることは相手方の厚意を負担に感じている証拠と受け止められるため、しばらく期間を置いてからお返しをすれば、その返報は喜んで行われるとの印象を与える。こうした交換は信用に基づくもので、それを長期間繰り返すことが社会の安定した絆を強める力となった。これは「贈答的交換」と呼ばれる。文書による約束は相手への不信を裏に隠しているが、同じ血縁、同じ祖先という観念は信用に基づく安心感と連帯感をもたらす。こうした共同意識が薄れつつあった当時、アリストテレスが、交換が行われる場所に美德の女神の神殿を建立して、「他人からの奉仕に返礼するだけでなく、次には自分から進んで奉仕をすることが義務であること」を人びとの胸に銘じさせると説明した所以である⁵⁸⁾。

家族という最初の共同体では、万物は共有なので、交換のためという目的は生じないが、村落という増大した共同体では生産の分業体制とともに交換が生じる。交換は、最初、お互いの信用に基づいて行われていたが、「財交換」と訳される *μεταδόσις* は「ある人々が交われないほど遠くではないが離れ離れに住んでいて、例えばその一人は大工、一人は農夫、一人は靴工、また一人は何かそのようなものであるとしても、お互いに不正をしないための法律を彼らが定め」⁵⁹⁾ていた社会的背景の前で行われていた。物々交換は、貨幣を介しない財間の交換として歴史的・論理的に見て原初的な形態である。アリストテレスによれば、このような交換術は有用なものがそのまま有用なものと取り換えられるだけで、交換される財における自足が要求される限りでしか行われないので、それ以上に進むことはない。したがってこの種の交換術は、自然的自足性を目指すものであるから、自然に反する取財術ではない⁶⁰⁾。

2. 交換手段としての貨幣 (C—M—C')

物々交換は、狭い範囲の中での濃密な人間関係で醸成された信用を前提にはじめて成り立つものであったが、やがて部族の数が多くなり血縁関係が希薄になっていくと、血縁の有無や濃淡が判別しにくくなり、血縁に基づく信用に代わる普遍的な信用が求められるようになった。物々交換といっても、それがいつも成立するとは限らないとすれば、双方が共に必要とするもの、つまり保存のきく耐久性を持ち、できる限り持ち運びに便利で均質な使用価値のある物資が選ばれる。それはまず、それ自体が有用な基本物資として価値のある「商品貨幣」として登場した。わが国では、これが「米」という財貨によって担われたことは周知のとおりである。山村に住む者と漁村に住む者との間で、後者が山菜を欲しないため、山菜と魚との交換の需要が成立しなくても、農村で生産される米は、双方ともに必需品なので、山の民は、山菜を求める農民と交換した米を持って漁村へ行き、山菜を求めている漁民と魚を交換することができる。問題は、「米」の商品貨幣としての機能であるが、その総量の変動や保存の耐久性や持ち運びの便利さにおいて金銀といった貴金属ほどの安定性はない。これに比べれば、貴金属は不変に影響されず、生産総量が安定しており、何よりもかさばらなくて腐らない。試行錯誤の結果、後に金本位制度が確立するが、物々交換の不自由さを克服するために、一般に鑄造貨幣が交換の仲立ちをするようになった。「貨幣は、たとえば、われわれが今のところは何ものをも必要としなくとも、もし何ものかの必要が生じたときにはそれが手に入るという未来の交易のためのいわば保証として役立つ」⁶¹⁾。こうした貨幣は合意あるいは協定によって存在する。後に金属は測定の反復の必要を避けるために定量を指示する印を押されるようになった。メイクルは、この過程を C—M—C' と簡略に表記した。以下、彼の用いる表記法に従ってこの過程を分析してみよう。

キャベツをもって穀物と交換しに市場へ行ったが、穀物が見当たらないとき、キャベツは腐る。腐らない商品（銀貨）が、あらゆる他の物の一般的等価物として受け容れられるとき、キャベツの交換価値を、穀物を獲得するこ

とから区別された働きとして理解できる。キャベツと穀物とが取引されるとき、交換作用は二つの働きを一つに合成する。貨幣は、この単一の働きを、キャベツの販売と穀物の購買との二つの働きとに分ける。つまり、時間と場所とにおいて分離できる。貨幣は将来における交換の保障としてわれわれに役立つ。貨幣はキャベツの交換価値をキャベツの使用価値から分離したものである。メイクルによれば、物々交換 $C-C'$ では売買の働きが単一の働きに融合しているのであって、これを分ければ、売るために商品が貨幣と交換される $C-M$ と、他の商品を買うために貨幣が交換される $M-C'$ とよりなる⁶²⁾。 $C-M-C'$ 循環は、使用価値をもって始まりかつ終わる。その目的は、必要とされるものを獲得することであり、いったん獲得されたら、循環の領域を離れて消費の領域へ入る。その限り、貨幣の使用は手段であって財の使用が目的であるから、 $C-M-C'$ の循環の目的は「自然的」であり、貨幣を倫理的に受け容れうる「必要かつ賞賛すべきもの」⁶³⁾ *μὲν ἀναγκαίης καὶ ἐπαινυμένης* に含めうる。

このように理解される貨幣は、それ自体が自然的な自足性を満たすために交換を行いやすくするための手段であり、このようなものとして交換に仕える範囲内で、貨幣は自然に反するものではありえない。ところが、いったん貨幣が存在し供給されたら、必要な交換から他の種の取引による取財が起こる。ワインの穀物との交換は、双方の望みを満足させればそれで終わりであるが、ワインや穀物を貨幣に換える交換は、貨幣の増殖を生み出す。貨幣はあらゆる他の財と交換可能であるので、貨幣の増殖が財の増殖となる。こうして交換が一般的に、自然的な十分さをもった有用な財を得る術となるのではなく、有用な財の交換を通した貨幣増殖の術に変貌する。

アリストテレスは、 $C-M-C'$ の交換を寛大に受け取っている。 $C-M-C'$ の目的は善い。貨幣の使用は目的のゆえに善いからである。商人術という悪しき意味での取財術において間違っているのは、その目的である。取引者が富を、有用な事物あるいは「真の富」よりも、交換価値、金銭として求めるからである。交換における事物の使用が善いか悪いかは、交換の仕える

目的にかかっている。ところが財を生産して市場に行き貨幣と交換する目的の中に、より多くの貨幣を得ようという目的は一緒に入っていないであろうか。財の製作目的と金儲けという目的とを区別できるであろうか。 $C-M-C'$ を完全に記述すれば、その売買の働きは $C-M/M-C'$ として切り離して表現できるが、この $C-M$ の売却行為の内に M の最大化の目的が見られる。ここに、 $C-M-C'$ の循環が、 $M-C-M'$ へと移行する所以がある。この移行を象徴する例が、営利目的に製作される「デルポイの短刀」の話である。

3. 営利商業 ($M-C-M'$)

発達した社会では商品は貨幣のために交換される。人びとは市場へやってくるが、それは消費する必要のあるものを買うために、育ててきたあるいは作ったものを売るためではなく、交換価値のある在庫を増やす意図をもって売るために買うことを目的にしている。言い換えれば、所有者は商品をもってではなく、貨幣をもって市場にやって来るが、商品を消費するためではなく、それを再び売却することで、より多くの貨幣を得るためである。彼はここで停止することなく、元の額をさらに増やそうとする。つまり商人術は、貨幣の蓄積を交換の出発と目的にしているのである⁶⁴⁾。

$C-M-C'$ の目的は、 $C-C'$ の目的と同じである。その目的は、必要とされる C' の特殊な有用さを獲得することで、貨幣の使用は C の売却と C' の購入という目的のための単なる手段でしかない。いったん、 C' が獲得されたら交換は自然的な終わりに到達する。しかし、 $M-C-M'$ は循環の外側に終わりを持たない。貨幣の形態における交換価値の量的増殖が、 $M-C-M'$ が持ちうる唯一の目的となる。二つの取財術の用法は同一の事柄に関連するので似ている。「というのは同じ財産の使用であるからである。しかし使用の目的は同じではない。むしろ一方においてはその目的は蓄財であるが、他方においてはそれと別なのである。ここからして或る人々にはこの蓄財が家政術の仕事と思われるに至る。そして貨幣からなりたつ財産を失わぬようにし

なければならぬ、或は無限に殖やさなければならぬと絶えず思うのである。そしてこの気持ちの「もっと深い」原因は善く生きることではなくて、ただ生きること熱中するところにある *αἴτιον δὲ ταύτης τῆς διαθέσεως τὸ σπουδάζειν περὶ τὸ ζῆν, ἀλλὰ μὴ τὸ εὖ ζῆν*」⁶⁵⁾。

では C—M—C' から M—C—M' への移行を示す「デルフォイの短刀」の例を紹介しよう。

それは安く売るために、多機能を備えるよう拵えられた万能ナイフのことである。それは、特定の仕事に専従する目的のためにのみ製作されるのではなく、より多く交換される目的のために製作される。それゆえにこの製作者の鍛冶屋は、けちな精神を示している。「けちな鍛冶屋はデルポイの短刀を何にでも向くように作る。道具は多くの仕事にはではなく、一つの仕事に隷属するとき、もっとも見事に作られたといえる」⁶⁶⁾。デルポイの短刀は粗雑な道具であって、その長所は安価だったことにある。この道具の製作は、最も効率よく仕事を行えるよう製作する特化した意図に服していない。その使用価値は、交換価値の考慮から起こった企画によって減殺されている。ところが、いやしくも「善い」と呼ばれる道具は優れた働きをするよう作られ、その目的のみを視野に入れて工夫されている。まさに自然は「一つのものを一つに向くように」(*ἐν πρὸς ἐν*) 作っており、「何にでも向くように作っていない」のである (*οὐθὲν ἡ φύσις ποιεῖ πενιχρῶς*)⁶⁷⁾。

現在では使用価値の粗悪化が、商業主義化に鼓吹されて過度になっている。買い替えを促すための意図的なモデル・チェンジによる旧式化、不要な装飾品付き商品の生産等が行われているが、「デルフォイの短刀」の例は、古代でも同様のことが行われていたことを証するものであろう。古代社会は市場経済ではなく、労働による生産は一般的に交換の形態をとっておらず、売買のためよりは消費のために引き受けられていた。共通の文化は全く商業の価値に好意的ではなかった。商業価値は尊敬されず、公的に賞賛されず、公共政策はその核心にそれを据えなかった。しかしこのような段差を認めても「デルフォイの短刀」の例は十分にありえたのである。

アリストテレスはここに明らかに貨幣術の濫用を発見し、 $M-C-M'$ で目指された目的を批判した。しかしながら、「デルフォイの短刀」の欠陥は、鍛冶屋の個人的なケチという性格の短所に負うのでもなければ、素材に問題があるのでもない。実は、商品が金銭との交換を目的に生産されるところに一般化できる社会的理由に負っていることを、さらに言及したのである。貨幣を追求する者は、不自然な仕方、どんな仕事でも、富を供給するビジネスの手段となしうる。アリストテレスは、軍事や医術や哲学でも、この種の例となりうることを指摘した。ソフィストたちはお金のために哲学を売り、医師は医療奉仕を売る⁶⁸⁾。 $C-M-C'$ は、アリストテレスの言うように無垢のものではない。製作品には使用価値があるとはいえ、そこには既に交換価値のためにも作られる可能性が織り込まれているのである。

メイクルによれば、アリストテレスが持ち出す「デルフォイの短刀」の例は、「必要かつ賞賛すべきもの」である $C-M-C'$ と「自然に背く」 $M-C-M'$ との間に、彼が引く目的の区別が単純にはつけられないことを示している。 $M-C-M'$ の目的は貨幣の蓄積であるが、それを $C-M-C'$ の目的の定義から除き去ることはもはや容易ではないと指摘した⁶⁹⁾。財を購入するためには十分な貨幣を獲得することが必要だから、アリストテレスの助言に従って行動するなら、鍛冶屋は生活できなくなる。また医術のような専門技術が貨幣のために追求されるとき、医術と貨幣獲得の二つの技術は相即相入して同一物の使用となる。アリストテレスは、このことを倫理的に認めないが、財の追求と貨幣の追求との区別の曖昧さに関して、メイクルは鍛冶屋と医師や哲学者とを区別する理由はないとした。どのような種類の活動でも、それが貨幣追求を含むなら、影響を受けないままに止まるとは考えにくい。彼は、アリストテレスは鍛冶屋を非難するが、それを他の商品の製作者たちにも同じように拡張して非難を一般化しないのは整合しないと批判する⁷⁰⁾。

しかしながら、このようなメイクルのコメントは行き過ぎているように思われる。「デルフォイの短刀」の例は、① 鍛冶屋の製作目的がナイフの固有の使用にではなく貨幣獲得にあること、② この貨幣獲得は無限の追求目的

となりうることの指摘にあった。しかし、当時の消費生活において貨幣使用が避けられないなら、貨幣を取得することは止むを得ないことであろう。医師や哲学者は、物財の製作をもってではなく、サービスによって貨幣と交換するのである。このとき、① 安直なサービスによって相手方から多くの富を得ること、② この富の無限蓄積を目指して仕事を行うことは、逸脱した交換形態 $M-C-M'$ に当たるかもしれないが、サービスの固有の目的を達せず、その報酬として相応の貨幣を得ることは何ら、 $M-C-M'$ には当たらず、依然として $C(\text{サービス})-M-C'(\text{消費財})$ の段階に属するであろう。それゆえに $C-M-C'$ と $M-C-M'$ とを正しく区別するポイントは、物財製作あるいはサービス奉仕の目的が、善き生のために貨幣を適度に取得することにあるのか、貨幣獲得自体を自己目的化してその無限追求に努めるかにある。鍛冶屋も医師も哲学者も、同じように貨幣の取得には関心を示すが、そのことが直ちに貨幣の無限追求に転じることを意味しない。メイクルは、 $C-M-C'$ から必然的に $M-C-M'$ へ移行する交換形態の「進化」を説いたが、アリストテレスは、前者から後者への移行は、ある意味で「分岐点」に立っているものであり、後者への移行は場合によっては「逸脱」の方向に転じうる可能性がある、と見たのである。

ちなみにアリストテレスは第 11 章の後半で、独占による金儲けの工夫について二つの事例⁷¹⁾を挙げている。これらこそがむしろ $M-C-M'$ の典型的な例である。

- ① タレスが天文の予想に基づきオリーブ油圧搾工場を廉価で借り受けて儲けたこと。
- ② ある者がシケリアで鉄工場から鉄を全部買い集め、独占販売して巨富を得たこと。

この話の主旨は、「人が売捌きを自分の手に治めるような風にすれば」金儲けの工夫ができるということにある。それは誰も関心を持たないときに安く借り受けたり購入したりして、人びとが高い需要を求めるときに、自分の好き勝手な値段で貸し出したり売り出したりすれば、巨額のお金を集めるこ

とができるという手法である。国もお金に窮乏すると、品物の専売をするのである⁷²⁾。彼は「それらのことを知ることはまた政治家にとっても有用である。というのは多くの国には、家にとっても同じように、いや、それ以上に金儲けやそのためのかような手段を必要とするからである」⁷³⁾と述べている。このような話は、明らかに彼の支持する取財術に應えるものではない。なぜアリストテレスはこのような物語を長々とさしはさんだのか？ この理解に際して、彼は取財に関することの「実行は卑しいことだけれど、その研究は自由人にふさわしいことである」⁷⁴⁾と述べている箇所が手がかりを与える。家長や政治家は、家政や国政について正しいあり方のみならず、取財術を尊重する人たちがどのような効率的方法を工夫するかを心得ておかねばならない。その結果、取財の逸脱したあり方も収集対象となる。取財術の使用の論議は、不自然ないくつかの実践も含むことになる。アリストテレスがそれをすべての国に勧めているかは不明瞭である。ある国はそのような不自然な実践を必要としているかもしれない。立法者は異なった国制がどのようなものを必要とするかについて無知であるわけにはいかない。最善の国制は不自然なものの必要を持たないであろうが、何が不自然的であるかの知識は、回避する目的のために有用である。ここにアリストテレスの現実的な思考傾向が見られるが、実を言えば、上記のような工夫を必要とする国として、自国で必要物を供給できないか、逸脱した国制のように、金儲けにしか関心がない国のことが念頭に置かれているのである。最終的に見て、利益を得ることの関心が、家政や政治活動の全体を消耗するようになることは最善とは言えないというのが彼の真意である⁷⁵⁾。

4. 高利貸し ($M-M'$)

家が村へ拡大すると、ある X について一方が多くを持ちすぎ、他方が足りないが、他の Y については一方が不足し、他方が過剰なとき、 $C-C'$ を生む原因となる。これが全発展を出発させる。そして交換価値の発展の第4形態が高利貸し *ὀβολοστατική* である。高利貸しの関心は $M-M'$ である。

アリストテレスはこの過程を、富を獲得する仕方の中で「最も不自然なもの」と批判した。既に『ニコマコス倫理学』第5巻第5章で、交換の対象となるすべてが比較しうるものとなるために貨幣は生まれてきたものであり、それがある意味における仲立ちとなる。すなわち、貨幣はすべてのものの値を測り、どちらの値が他方を上まわるか、それとも下まわるかをも測ると述べていた⁷⁶⁾。これは貨幣の価値測定機能として、彼自身、是認していたものであるが、『政治学』第1巻第10章の後半で、貨幣の子たる利子 *τόκος* は取財術の中で最も自然に反するものであるとした。「貨幣は交換のために作られたものであるが、利子は貨幣を一層多くするものだからである（利子は貨幣の子たる貨幣として生まれるのである *ὁ δὲ τόκος γίνεται νόμισμα ἐκ νομίσματος*）。したがって、これは取財術のうちでもっとも自然に反した *μάλιστα παρὰ φύσιν* ものである」⁷⁷⁾と述べている。徴利行為は不自然的取財術の項目に入るが、それは利潤追求を目的とする商行為以上に非難される。

「憎んで *μισεῖται* もっとも当然なのは高利貸しである。それは財が貨幣そのものから得られるのであって、貨幣がそのために作られた当のもの〔交換の過程〕から得られるのではない」⁷⁸⁾からと非難した。取引によって他人から利益を得るのは、自然に従うものでなく、恥すべきことであるが、高利貸しは、最も憎んでも当然のものである。取引は少なくとも、貨幣を商品あるいは自然的財との交換によって得るものだが、高利貸しはそのことすら行わない。それは商品をバイパスして貨幣から直接貨幣を作ろうとする。それは自然からいわば二度離れるもので、最も自然に反する行為である。

当時の古代アテネ社会における貸借の研究によれば、「利子」という言葉は当時高利貸しの意で用いられた⁷⁹⁾。しかし、アテネ市民間の貸与は圧倒的に小金貸しであつたらしい。通常、友人や知人間で行われ、その効果の部分は友愛の絆を助けることであつた。専門の金貸しは範囲においても総額においてもそう大きいものではなかった。アリストテレス生存当時の「高利貸し」⁸⁰⁾ *τοκοισταὶ* とは、アゴラで小売りを行っている者を食べ物にする小規模

の高利貸しや異邦人（在留外人）の「銀行家」の類であった。彼らは市民社会の周縁に位置する者で、彼らの常連の顧客も市民の資格を与えられてはいなかった。人びとは通常の互酬的な貸借において、「銀行家」*τράπεζα* に借りに行く市民を信用していなかった。生産のための企業投資も存在しなかった。ギリシアの銀行家は、貨幣交換者として生計を立てており、利子を目的に貸し付けたり、寄託金に利子を支払ったりしたとの明白な証拠はない。利得のために貸すことは信用の破壊であったかもしれない。銀行家は自分自身のお金を貸し付けたのであって、預金者のお金を貸したのではない。「銀行家」は最初、金貸しではなかった。彼らの奉仕は、寄託物の安全保護であった。有価物や文書を含み、証人や保証人として働き、貨幣を交換し、居留外人・非市民・信用されない者に貸すことであった。

したがって、アリストテレスが問題視したのはどちらかと言えば、小額の貸し付けで困窮した貧者から高い利息を取るといった類いの行為である。E. バーカーの言葉を援用すれば、「貸主が 100 £ 貸して、年末に 120 £ 要求すれば、多くの消費者から一連の小さな窃盗によって、20 £ 獲得したときよりも大きな目に余る窃盗の罪を犯している。彼は一撃で、あるいは指に触れることなく利得を稼ぐ。しかし高利貸しの力が不自然的であるというのには別の意味がある。彼は自然からというよりもむしろ自分の仲間から利得を稼ぐだけではない。彼は不毛の金属からある子を産ませている。ゆゆしい出生、不自然的な堕胎—そのようなものが利子であって、まさにその存在の本性によって不毛でなければならないはずの本人から発現している。無は何ものをも生み出しえない (*Nummus nummum parere non potest.*)。けれども高利貸しは自然の表面から跳び上がって、不可能を事実とする」⁸¹⁾。

以上のような理由づけを見れば、アリストテレスが今日にいう「利子の理論」を理解しなかったことは容易に見て取れる。しかし後のトマス・アクィナスに至って彼の利子論は発展的に修正される。貸手は借手にサービスを行い、後者はこの対価を支払わねばならない。彼は一時期自分のお金のコントロールを失う。その代わりに、用いられたかもしれない失われた期間に対す

る補償を要求する。彼が貸しているのは不毛のお金ではない。彼が貸すお金は「道具」と交換されるが、この道具は元手金を超えたお金を生み出すものとなる。借手はその剰余から喜んで貸主に割当分を支払うことができる。すべてこうしたことが利子に当て嵌まる。しかし、アリストテレスにそのような考えはなかった。一般に商業に対する反感を持ちながらも、彼が念頭に置いていたのは、生計を維持するために消費せざるをえないが、返済できるようにしても利子をもって返済できずに暮らしている低所得者層に対する貸付のことである。たとえば、再びパーカーの例を持ち出せば「不順な季節に苦しみ、冬に備えて食料を得、春に備えて種を蒔くために自分の土地を抵当に入れる農民に融通された貸付のことである」⁸²⁾。こうしたことがアテネではソロンの時代に百鬼夜行となった。これらの顛末は債務帳消し令によって一掃されたことで知られるが、中世にも横行した高利返済の苦しみに接した学者たちが、アリストテレスの説こそ、キリストの福音書の教えに調和するものであり、高利の苦しみから解放する論拠を与えてくれるものと期待したのも理由のないことではなかったであろう。

註

* アリストテレスの原典は、オックスフォード・クラシカル・テキストにおけるロス校訂版を用いた。引用はベッカー校訂版のページ数に従う。また著作の略記も慣例に従う。『ニコマコス倫理学』はほぼ高田三郎訳（岩波文庫版：上下2巻）、『政治学』は山本光男訳（岩波文庫版）を参照したが、ただし、訳語のいくつかについては、邦訳に違いがあるので、筆者が従来用いている言葉で統一した。その他の著作は、岩波書店刊行の『アリストテレス全集』訳を参照した。

- 1) 遠藤哲夫『管子』（上）、新釈漢文大系42、明治書院、平成元年、第1巻牧民第一。この有名な言葉の前にある冒頭の言葉は「凡そ地を有ち民を牧ふ者は、務め四時に在り、守り倉廩に在り。国に財多ければ、則ち遠き者来たり、地、辟擧すれば、則ち民留處す」（13頁）とある。ただし、後で「人心の変は、余り有れば則ち驕り、驕れば則ち緩怠なり」（第5巻重令第十五、275頁）とあるように、「足る」という言葉には奢侈を拒む節度の意が込められている。
- 2) 内野熊一郎『孟子』、新釈漢文大系4、明治書院、昭和45年、滕文公章句上。167頁。同じような趣旨の言葉として「聖人の天下を治るや、菽粟有ること水火の如く

ならしむ。莖粟水火の如くにして、民焉んぞ不仁なる者有らんや」(民心章句上、461頁)も挙げられよう。

- 3) 法学研究を政治的・倫理的関心および社会学的研究から引き離し、法と呼ばれる現象に固有法則性があることを論証して「純粹法学」を提唱した H. ケルゼンは「根本規範」を「仮設して」実定法の固有領域を確保しようとした。これと並んで、スイスの経済学者レオン・ワルラスは「絶対的な自由競争という仮説的な制度のもとにおける価格決定の理論」を「純粹経済学」の課題とした。その果実は数理経済学であった。両者の学問方法論は厳密科学を志すうえで類似している。大田一廣・鈴木信雄・高哲男・八木紀一郎編『経済思想史——社会認識の諸類型——』名古屋大学出版会、1997年、193-203頁参照。
- 4) 西田幾多郎は歴史的現実を深く捉えるために「行為的直観」という言葉を用いる。それは歴史を必然的法則のもとに記述する目的論的思考あるいは弁証法的思考に対する批判として提示されたものである。歴史的に制作されたものの構造は、たとえば芸術や思想、あるいは法制度や経済制度に見られるように、作られた作品や制度が作る主体を作る行為的直観の矛盾的自己同一の境において捉えられる。法律は立法者の手を離れて妥当し、貨幣は鑄造者の手を離れて通用する。このように見られた物は死せるものではなく、見る人間の作用を引き起こす生ける力を持つ。西田幾多郎全集第8巻『哲学論文集 第二』所収論文「実践と対象認識」481頁、「種の生成発展の問題」521頁、同全集第10巻『哲学論文集 第四』所収論文「ポイエシスとプラクシス」127頁(岩波書店、1979年)。
- 5) *Pol.* 1323a25-27.
- 6) *Pol.* 1323b7-11.
- 7) *EN.* 1107a6-8.
- 8) 両概念が対立的に用いられる箇所として、*Pol.* 1338b2, *Pol.* 1228b36. も参照。
- 9) *Pol.* 1333a36. τὰ δ' ἀναγκαῖα καὶ χρῆσιμα τῶν καλῶν ἔνεκεν.
- 10) *Pol.* 1323b40-1324a2.
- 11) *Met.* 1015a20-26.
- 12) *Pol.* 1327a18-20. *Pol.* 1327a25-27.
- 13) *Met.* 1023b19-20.
- 14) *Met.* 1023b23-24.
- 15) *Met.* 1023b26-28.
- 16) *Met.* 1023a21-23.
- 17) *Pol.* 1253a20-22.
- 18) *Pol.* 1253a26-29.
- 19) ドイツの政治哲学者 Andreas Kamp は、アリストテレスは人間の本性を実現したプロニモスを基準に理想のポリスの構成を考えたとして、その構成を以下のように

表示した。

その原理によれば、ポリスは、秩序づける者がエネルギー、秩序づけられるものがデュナミスとして上下段階秩序を形成する。

1. a) ポリスに参加する人びとの全体＝一般的な意味での *κοινωνία πολιτική*
b) 状態，領土，建築様式，全体的な秩序だった外的現象
2. a) 国民体/*πολιτεία*＝勝義での *κοινωνία πολιτική*
b) 非－国民
3. a) 能動市民/*πολίτευμα*＝勝義での *πολιτεία*
b) 被治者・被支配者としての一般国民

上記の支配 a)－被支配 b) 関係を，エネルギーとデュナミス関係で表示すれば，以下のようになる。

πολίτευμα エネルギー
πολιτεία 能動国民（エネルギー）
 一般国民（デュナミス）
κοινωνία 国民（エネルギー）
 非－国民（デュナミス）

すなわち，あらゆる人間はポリス創設以前はたんにデュナミスでしかない。たとえば像がまだ建てられていないときは，「像の大理石」とは言わずに，「像のための大理石」というのに等しい。これに対してポリス創設後は，コイノーニアとポリテイアとは異なった質料－形相結合体となり，まず非－国民が，次に一般国民がデュナミスとなり，ついにポリテウマのみがポリスの形相あるいは実体本質をなす。*Die politische Philosophie des Aristoteles und ihre metaphysischen Grundlagen*, 1985, S.177–172, S.167.

20) *Pol.* 1328a21–28.

21) *Pol.* 1328b5–15.

22) *Pol.* 1328b20–23.

23) *Pol.* 1329a34–38. 国において配分されるべき諸機能が『政治学』第4巻第4章と第7章において列挙されている。注釈家のP. ニューマンはそれを次頁の表のように対照した。

表で見られるように，アリストテレスは「国がそれらなくしては存しえない部分」と「国の部分」(*ὅν μὲν τοίνυν ἄνευ πόλις οὐ συνίσταται καὶ ὅσα μέρη πόλεως*)を，ひとまず区別なく「国の部分」*μέρη τῆς πόλεως*として列挙しているが，第7巻第9章の末尾で両者を明確に区別している。なかでも評議と役と裁判に従事する三つの国家機関は，国制の核心部分であるから，*μόρια τῆς πολιτείας*と呼ばれて区別される (1297b38 sqq.)。

Newman, W. L., *Politics of Aristotle* (4vols., 1887–1092) 1vol., pp.97–98.

第4巻 1290b40sqq.	第7巻 1328b2sqq.
1. γεωργοί 農民	1. γεωργοί 農民
2. τὸ βάνανσον 職人	2. τεχνῖται 職人
3. τὸ ἀγοραῖον 商人	3. τὸ μάκινον 軍人
4. τὸ θητικόν 日傭取り	4. τὸ εὖπορον 富裕な部分
5. τὸ προπολεμῆσον 戦士	5. ἱερεῖς 神官
6. τὸ δικαστικόν 裁判上の正義に参与する部分	6. κριταὶ τῶν ἀναγκαίων καὶ συμφερόντων 必要なものや利益あるものの判定者
7. τὸ ταῖς οὐσίας λειτουργοῦν 財産をもって公共に奉仕する部分	
8. τὸ δημεουργικόν 公僕の部分	7. τὸ θητικόν (1329a36) 日傭取り
9. τὸ βουλευόμενον καὶ κρινον περὶ τῶν δικαιῶν τοῖς ἀμφισβητοῦσι 評議する部分と係争者たちのために正しいことについて裁く部分	

- 24) *Pol.* 1254a8–10.
25) *Pol.* 1254a14–17.
26) *Pol.* 1256a3–10.
27) *Pol.* 1256a10–11.
28) *Pol.* 1256a17–19.
29) *Pol.* 1332a9–11.
30) *Pol.* 1332a26–27.
31) *Pol.* 1256a17–19.
32) *Pol.* 1256a31–40.
33) *Pol.* 1256a40–1256b4.
34) *Pol.* 1256b20–22.
35) *Pol.* 1256b26–27.
36) *Pol.* 1256b27–30.
37) *Pol.* 1256b30–39.
38) *Met.* 974b9–16.
39) *Pol.* 1257a4–5.
40) *Pol.* 1257a9–12.
41) *Pol.* 1257a16–17, 1257a13, 1257a14–15.
42) *EE.* 1246a26–31. 物の自然的目的のための使用が自体的 *per se* であるのと区別し

て、不自然な目的のための使用は付随的 per accidens とされる。こうした区別のうえで、必ずしも付随的な使用が不自然な目的のためとは限らないと述べている。すなわちある物の使用が交換に用いられることは不自然であるとまでは言っていない。

- 43) *Pol.* 1257b2–10.
- 44) *Pol.* 1257b20–24.
- 45) *Pol.* 1257b19–22, 1257b31.
- 46) Peter L. Phillips Simpson, *A Philosophical Commentary on the Politics of Aristotle*, 1998, pp.60–61. 本書の記述に基づいて図示化した。
- 47) *Pol.* 1258b27–28. **τρίτον δὲ εἶδος χρηματιστικῆς μεταξὺ ταύτης καὶ τῆς πρῶτης.**
- 48) Simpson, P., *Ibid.*, p.61. *Pol.* 1258b27 の注釈を参照。
- 49) ハンナ・アーレント（志水速雄訳）『人間の条件』ちくま学芸文庫，2004 年，19–20 頁参照。
- 50) 前掲訳書，21 頁参照。
- 51) 前掲訳書，135 頁参照。
- 52) 前掲訳書，288 頁，306 頁，314 頁参照。
- 53) 前掲訳書，22–25 頁参照。もっとも、アーレントが指摘したこの区別は、「人間とは何であるか」と問うとき、what の疑問文で問うか、それとも who の疑問文で問うかの相違のもとに理解されており、アリストテレスが念頭に置いた区別としてわれわれの強調するものと異なる。彼女は「人間の本性」に対し不可知論の立場をとっているが、アリストテレスは、これへの問いを τὸ τί ἦν εἶναι と定式化した。この点で本質論の線上にあるとも見られる。人間は精神と肉体の結合体であり、条件づけられた存在であるが、条件づける要素として外的要因と内的部分がある。そして条件づけ系列の最後の核心部分はそれ自体条件づけられないので、無条件に ἀπλῶς しに語られない。この「無条件性」は、歴史的変異性を超える含みを持っている。
- 54) Kamp, *op. cit.*, S.184.「知慮と技術の区分は、善く秩序づけられたポリス内での垂直的区別原理であって、経済的階級の上に立つ政治的階級の階級区別に導く」。
- 55) Meikle, Scott, *Aristotle's Economic Thought*, 1955, p.88.
- 56) *Pol.* 1252b12–18.
- 57) カール・ポランニー『経済の文明史』玉野井芳郎・平野健一郎編訳，日本経済新聞社，1990 年，222–223 頁。
- 58) *EN.* 1133a3–5.
- 59) *Pol.* 1280b17–22.
- 60) *Pol.* 1257a28–29.
- 61) *EN.* 1133b10–13.
- 62) Meikle, *op. cit.*, pp.53–54.

- 63) *Pol.* 1258a40.「獲得術の或る種類のもは合自然的に家政術の一つの部分」という場合の正しい取財術である。*Pol.* 1256b27, 1257b20 f.
- 64) *Pol.* 1257b21 f.
- 65) *Pol.* 1257b36–42.
- 66) *Pol.* 1252b3–5.
- 67) *Pol.* 1253b1–3.
- 68) *Pol.* 1258a10–24, 1259a17, *EN.* 1163a27 ff., *Met.* 1004c17 ff.
- 69) Meikle, *op. cit.*, p. 92.
- 70) Meikle, *op. cit.*, p. 94.
- 71) *Pol.* 1258b40–1259a33.
- 72) *Pol.* 1259a21–22.
- 73) *Pol.* 1259a33–35.
- 74) *Pol.* 1258b9–11.
- 75) Meikle, *op. cit.*, pp. 65–66. 当時のアテネにおける商慣習については、本書で引用された Paul Millet, *Lending and Borrowing in Ancient Athens* (Cambridge, 1991) を参照。
- 76) *EN.* 1133a20–21.
- 77) *Pol.* 1258b4–8.
- 78) *Pol.* 1258b2–4.
- 79) たとえば、古代中国前漢の武帝は、財政難を打開するために、物流の円滑を図る均輸法と物価の安定を図る平準法を用いたが、これらの方法はここでアリストテレスが挙げた例に似ている。強制的貢納によって物資を不足地に移したり、物価の安いときに買い入れ、高くなった時を見計らって売るといったように、商人ではなく国が収益を図っているわけである。武帝による塩・鉄・酒といった主要物資の専売も同様である。
- 80) *EN.* 1121b34.『倫理学』では、「僅かばかりの金銭を高い利息で貸しつけるひとびとのごとき。これらのひとびとはいずれも取得すべからざるところから取得し、取得すべからざるところのものを取得するのである」と特徴づけ、「汚い利得欲」と非難している。
- 81) Barker, Ernest, *The Political Thought of Plato and Aristotle*, 1959, p. 385.
- 82) *Ibid.*, p. 387.

